日本共産党の地域新聞　発行所：日本共産党夕張市委員会　夕張市千代田2番地の2　TEL &FAX　52-3097　2011年7月17日（日）第1406号(1)

民報ゆうばり

「安心できる医療・介護・福祉を！」

「石炭博物館連絡協議会」で市民の知恵を！

「住民自治基本条例」策定、暮らし守るためにも財政破綻の検証を市民・議会・行政の三者で！

前号に引き続き、6月定例議会においてのくまがい桂子議員の質問と答弁を掲載します。

「安心できる医療・介護・福祉のまちづくりを」―国保は所得により、7割・5割・2割の減免、失業にも減免有

▼「昨年10月に共産党が実施したアンケートの回答で、多くの市民が国保料・介護保険料の負担が重いと訴えている。市内の実情・問題にどう対処するのか。」との質問に、鈴木市長は、「一般的な医療はもちろん、70歳以上の高齢者が多い本市においては、生活習慣病の予防・早期発見、リハビリ、在宅医療、市内外と連携した初期救急＋介護福祉士との連携や包括的な医療が大切。国保の減免では、低所得者に対し、7割・5割・2割の減額、退職を余儀なくされた場合、算定額を30％にするなど、申請による減免を行っている。

介護保険料も災害や失業の場合、減免や納付猶予の措置がある。世帯の3割が高齢者単身世帯なので、相談体制を充実させたい。

住宅については、高齢者専用住宅、軽費老人ホーム、養護老人ホーム、特別養護老人ホームがある。

障害者については受け入れの充実が求められているが、清光園でグループホームを建設。今後も社会福祉法人との連携を深め、家族の不安を解消するため、相談体制を充実させたい。」との答弁でした。

「夕張の歴史的遺産の保全と活用について～石炭博物館に学び、芸員を・市民とともにつくる博物館を」―夕張の歴史認識を共有のため石炭博物館連絡協議会を設置し、知恵を集めたい。

▼「石炭博物館に学芸員を置き、市民とともにつくる博物館の構想・実施を」との質問に、「石炭博物館は、大変貴重で、資料の収集や保全、また、空知産炭地の代表として他地域の炭鉱遺産とも連携して将来にわたって社会的価値を磨いていくよう努めていきたい。石炭博物館連絡協議会で「開かれた博物館」を目指した協議をし、市と指定管理者・市民の三者で機能を補完しあい子どもの世代へ引き継いでいきたい。」との答弁でした。

「市内には南大夕張鉄道保存会や歴史的な坑口、語り部活動に意欲を持つ元炭鉱マンなどもおり、市内全域が博物館ともいえる。エコミュージアムとしてこれらを活用すべきではないか」との再質問に、「市内には、さまざまな歴史的なものが点在している。夕張の歴史を市民が共有し、市民参加、活用をこの会（石炭博物館連絡協議会）で論議して、炭鉱で働いた人や豊富な知識を持っている人にサポートいただくことで、様々な知恵を集めたい。」との答弁でした。

「住民自治基本条例について市民と共に策定を」―限られた財源の中で、まずは市民参加のシステムをつくる環境整備が必要

▼「住民がどうやって市政に参加するのかを決める、自治体の憲法といわれる住民自治基本条例を、新体制がスタートした今こそ住民と共に作るべきでは」という質問に

「人口減、少子高齢化、経済、多様な行政サービス、効果的、効率的な市民参加、NPOとの共同、多様な主体との連携が必要だが、財政再生計画の中で、国や道の指導のもと、限られた財源の中でまずは、市民参加システムをつくる環境整備が必要。」との答弁。

再質問で「新体制がスタートしたが、自治体の憲法をつくろうとしても、財源が限られているという答弁。住民が市政に参加し、暮らしを守るためにも3百億を超す借金が妥当なものか、市民・議会・行政で検証する場を要望する」と締めくくり、質問を終わりました。

共産党議員団 空知振興局交渉

7月6日、日本共産党南・北空知議員団は、空知振興局に事前に提出した要求書をもとに、交渉を行い、13議員・候補が参加しました。

交渉の内容は、生活保護世帯の軽自動車保有の条件緩和、介護職の処遇改善、TPP断固反対、エゾ鹿捕獲、震災ボランティアの高速道路無料化、30人学級の拡大、医療の充実、放射線測定機の全校配備など、両議員団85項目にわたり、熱心に要求の実現を訴えました。

泊原発ってどんな発電所？

＝新婦人道本部の見学会に参加して＝

新婦人夕張支部事務局長　滝口　洋子

７月１日、新婦人北海道本部「泊原発見学ツアー」は、総勢44名で札幌駅出発（夕張から２名）。

同行してくれた原発問題全道連絡会の米谷さんの説明を受けながら、現地まで車中で学習。

「泊原発見学ツアー」に参加された皆さん

泊原発の運転期間は１号機21年、２号機19年、３号機は８か月。05～10年の補修・取替・改造は、報告されているだけで１号機21件、２号機17件、３号機２件。（実際にはもっと多いそうである）

原子炉本体が老朽化していること、管理不徹底で安全性には問題があると米谷さんが資料に基づいて指摘。

途中から合流した新婦人岩内支部長の大石さんは「温排水（７℃）で磯焼けが生じているのではという疑問も根強く、北電や道による正確な調査と対応が急がれる」と話された。

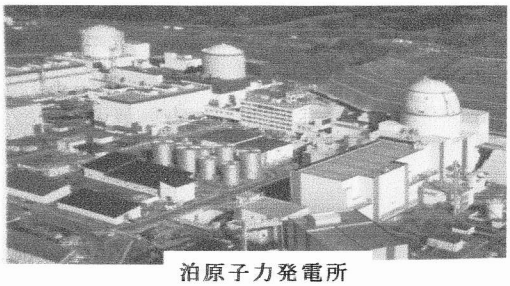
現地では、泊原発の方に原子力ＰＲセンター「とまりん館」・展望台等を案内してもらったが、20年経って点検をしたところ、「まだまだ使えるとアメリカが言っていた」「緊急安全対策の一つとして、移動発電機車を海抜31ｍの所に配備した」と自信ありげに話す様子にはびっくり！

福島第１発電所発電所が未だ収束の目途が立たない現時点においても、『安全神話』を通し続けることに驚いた。

更に、原発で１５００人働く人のうち、正社員は４６０人余りと聞いて、劣悪な労働条件で働く人たちの多さに驚き、危険にさらされている現状を突きつけられる。

構内、展望台への区域へは、厳重な本人確認と、携帯電話やカメラの持込を禁じられた。なぜそのような必要があるのかと首を傾げる。

とにかく、使用済み核燃料の最終処理の技術が無い現状で、核のゴミは増え続けるのだから『原発はいらない』の思いを強くして帰路に着く。


泊原子力発電所

浄水場見学会　老朽化した浄水場立て替えなどのため、水道料金の値上げが予定されています。浄水場の現状を見に行きませんか。

＊日時＝7月23日(土)13時～17時
＊集合＝市役所2階駐車場13時
＊参加費・定員＝無料・30名
＊申し込み・詳細＝☎52-3152へ

国会「かけある記」

日本共産党　参議院議員

紙　智子

かならず「原発ゼロ」へ

七月二日、明治公園で行われた「原発ゼロ」をめざす集会には、全国から二万人をこえる人が集い、熱気であふれました。北海道から参加したみなさんとも交流。福島県からも、三〇〇人をこえて、避難先から集会に来たという人もいました。

福島のテントを回ると、産直の果物やジュース、物品の中に、「までいの力」という飯館村のまちづくりが紹介されている本がありました。飯館村は、合併せずに、独自のまちづくりにとりくんでいたのです。「までい」とは「真手」という古語が語源で「両手で」の意味。手間ひま惜しまず丁寧に心をこめてという意味だそうです。

そういえば、私の母も「あの人は・・・(・・・)な人だね」と話していたことを思い出しました。飯館村の「までいライフ」のメッセージは「暮らし方を少し変えてみよう、戦後一貫して大量生産、大量消費、大量廃棄によって作られてきた今日の日本経済の中に、少しスピードをゆるめてみよう。走っている人は、歩く。歩いている人は立ち止まる。立ち止まった人はしゃがんでみる。そうすると足元の花の美しさが見えてくる・・・」。もう一つは、人と人のつながりを深めてみようということ。

村民みんなで取り組んでいる、まさにその途上で、今回の震災、原発事故にあい、村ぐるみでふるさとを離れなければならなかった。村民の悔しさがひしひしと伝わります。かならず帰れるように、そして、二度とおきないように、かならず「原発ゼロ」へ。